

浄土

monthly
JŌDO

April 2001

4



法然上人鑽仰会

日本テレコムで、
21世紀も
思いきりしゃべったろ。

市内も、県内も、県外も、国際も。
マイライン選ぶなら、日本テレコム。

OK!

マイラインまると、日本テレコム。



電話会社選択サービス

マイライン

平成13年10月10日申込受付開始
平成13年5月1日サービス開始

マイラインの「日本テレコム」へのお申し込み方法

「マイライン」「マイラインプラス」は、市内通話、同一県内の市外通話、県外への通話、国際通話の4つの通話区分で、ご利用になる電話会社を選んで登録する、電話の新しい制度です。月々のご利用料金はかかりません。日本テレコムをお選びになると、0088(国内電話)、0041(国際電話)などの番号を押さなくともご利用になれます。現在、日本テレコムにご加入の方の割引サービス等は継続してご利用いただけます。

日本テレコムにご加入の方へは直接、「マイライン申込書」をお送りいたします。未加入の方は、下記のお客様センターまたはホームページへお問い合わせください。

※「マイライン」「マイラインプラス」は、NTT東日本・西日本のサービスであり、日本テレコムはマイライン事業者協議会のメンバーです。

●マイラインのお問い合わせは
お客様センターまたはホームページへ



0088-82

(無料) (受付時間) 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ

<http://www.japan-telecom.co.jp/>

インターネット(ODN)も、携帯(J-PHONE)も、通信まると日本テレコム。

寺院紀行

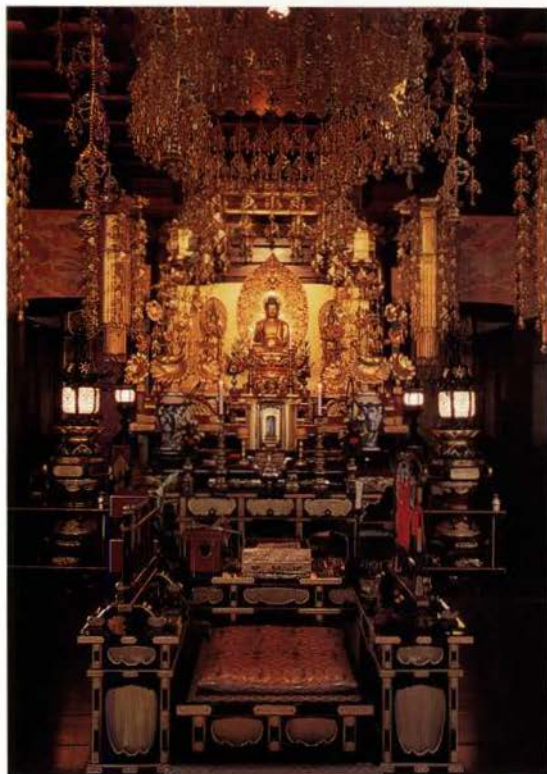
寺に歴史あり。
人々に信仰あり。
日本の
心の故郷を紀行する。

東京・江戸川

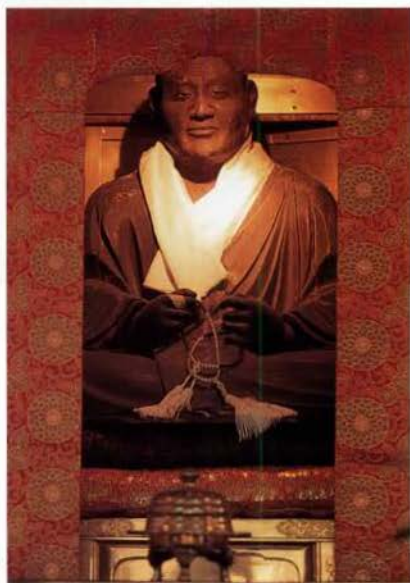
明福寺

ルンビニー学園の先生方に囲まれる明福寺
福井豊信住職と、山門から見る明福寺本堂





明福寺本堂内陣。阿弥陀如来、観音、勢至の両菩薩、そして善導大師、法然上人の像が祀られている



親鸞堂に祀られている親鸞聖人真影。素晴らしい木像である



親鸞聖人が明福寺に残
していった聖徳太子像

親鸞聖人の旧跡を記した「二十四輩順
拜図會 後編武藏一」の明福寺の絵図



本堂裏手の鏡ヶ池と袈裟掛松(左手)





園児に囲まれる福井住職。園長先生は人気者で、子供がすぐに集まってきた

左から本堂、親鸞堂、太子堂。手前右が園庭への入口になり、左下は園児の送迎バス



江戸川は区名ともなった重要な川で、かつて利根川から江戸に通じる川としてこの名がつけられた

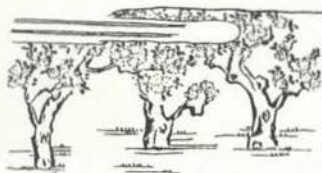


本堂内にあるパイプオルガン。今も、いい音を奏でている

浄土

2001/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 明福寺	写真＝タカオカ邦彦	1
シリーズ・詠唱 月影	藤堂恭俊	6
表紙の言葉	宇高良哲	13
シリーズ・詠唱 吉水流詠唱のあゆみ	松濤基道	14
寺院紀行 東京江戸川・明福寺	真山剛	24
響流十方	小村正孝	34
連載「くすり箱」	市川真人	38
『法然の哀しみ』を読んで	中野正明	40
仏教歳時記	佐々木美冬	46
Ｊフォーラム		47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	51
編集後記		52



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猊下
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

シリーズ
詠唱

月影

月影の

いたらぬ里はなけれども

ながむる人の

心にぞすむ

(前編)

法然上人のおうた研修会(第一回) 講義より

大本山増上寺第八十六世法主

藤堂恭俊

一番大事な「月影」のお歌から始めたいと思います。このお歌を前半と後半とにわけて、受け取らせて頂きたいと思います。前半は阿彌陀さまの本願、つまり阿彌陀さまのお慈悲の広い暖かい御心が、わたし達を包み込んでいて、そして誰一人として漏らしてはいないということです。「月影の いたらぬ里はなけれども」の月はいうまでもございません、阿彌陀さまの光明を月の光に喩えてお歌いになっておいでになる訳でございます。だからその阿彌陀さまの光明は、ただの光明ではありません。わたし達を暖かく広く、一人を漏らすことなく包みこんでいてくださいます。阿彌陀さまの本願、阿彌陀さまのお慈悲、これでございます。

佛さまというお方は、わたし達人間と違ひまして、みんなそれぞれ、お悟りをおひらきになっていらつしやいます。お悟りをおひらきになっておるといふ点では、どの佛さまもみんな一緒でございます。しかも、お悟りの中身には、上下、優劣、そういうものはなにも無い訳です。みんな同一平等のお悟りをおひらきになって下さっています。その点では皆一緒でございます。

しかしながら、阿彌陀さまは、阿彌陀さまに相應しい、お働きをしてくださいます。他の佛さまは、阿彌陀さまの真似は出来ない訳です。阿彌陀さまには深くて想い、深重の誓願があります。四十八通りの願を立てられています。阿彌陀さまは、お悟りをひらけばひらくほどに、あらゆるお方の生活振りを見ていて、怪しくて怪しくてもう見てはおれない、欲の泥沼にもうはまりきっている衆生、怒りの心で我が身を焼き尽くそうとしている衆生、簡単にものどおりを踏み外して、躓いたり転んだりしている衆生、見ちゃおれないと、何としてでもまともに、一人歩きが出来るようにしなければならぬと、そういう衆生で

あるわたし達に対する、深い深いお慈悲の心をもつて、その為に、「わたしは将来佛になつたならば、こういうことをしたい」と、いう願を立てられた、それが四十八通り在るわけでございます。

その中で一番このわたし達に関わってくるのが、「南無阿彌陀佛」の第十八の願でございます。いくら尊いその十八番目の称名念佛の本願が在ったとしても、阿彌陀さまご自身がお早くお亡くなりになるようでは、役に立たないわけです。ですから阿彌陀さまは無量寿でいらっしゃいます。永久の御命をおもちです。しかも日本なら日本だけではない、宇宙全体に関わりを持つような、無量光でいらっしゃいます。無量寿、無量光のお方、時間と空間を超えて、このわたし達に何時でも何処でも、関わって下さる、そういうお方でいらっしゃいます。だからこそ、「我が名を称えよ。我が名を称えよ」と阿彌陀さまが、このわたし達に向かって言い続けられておられるのです。しかし耳は付いていてもわたし達は、阿彌陀さまのこの「我が名を称えよ」と言い続けているそのお声を、聞くことができないでいるのです。本当はこれ程大事なことはないわけなのです。

そしてそれをお聞きした者が「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と御名をお称えをするのが、後の部分でございます。みんなどの人も阿彌陀さまの暖かいお広い御心に包まれて、生かされておりますけれども、そのことに気づかないまま、知らん顔しておる訳です。

「さえられぬ 光もあるを おしなべて へだて顔なる あさがすみかな」

と、あさがすみは皆、お好きでございます。桜が咲いたら皆もう、桜に浮かれて、阿彌陀さまほつたらかしといて、まその様な体たらくでございますね。そこでこの阿彌陀さまと阿彌陀さまの御心を頂戴して、御心のままをその通りに、南無阿彌陀佛と、貴方の御名を

お称えをする。救う阿彌陀さまと、救われるわたし達、その阿彌陀さまの御心が、御心通りにお応えするのがこのわたし達だから、「南無阿彌陀佛」とお称えすれば、阿彌陀さまはお悦びになることは当然でございます。阿彌陀さまは十劫の昔に、正覺を成就されて、佛さまになられたわけですが、わたしの阿彌陀さまは未だ正覺を成就されてないかも知れません。わたしが至らないものでございますから、阿彌陀さまの御心に叶ってなければ、未だわたしの阿彌陀さまは成佛されていない。そういうように、主体的にお念佛というものを受け止めていくことが、大変これは大事な訳です。

今日の政府は、みな困った困ったといえ、「よしよし、金出せ金出せ」で、ばらまいてますけれども、阿彌陀さまはそんなふうにお許しをばらまいておいてではないのです。一人一人を皆目標にされておる訳です。阿彌陀さまという方はお独りですけれども、そのお独りの阿彌陀さまが、不特定多数のわたくし達に、みんな一人一人に浸透するように、願を立てて、「我が名を称えよ、我が名を称えよ」と、仰せになっている。ただ何とはなしに「我が名を称えよ」なんて、まるで選挙の応援演説みたいに、「聞いとも聞いていないでもいい。僕はワーワーいうとつたらエエ」というようなそんなものじゃないのです。阿彌陀さまという方はお独りでも、そのお心を頂戴する人は不特定多数です。その不特定多数の一人一人に行き渡るように「我が名を称えなさい」と、仰せになっています。それでもなかなかこの、耳を傾けてそれを頂戴出来ないのがこのわたし達なのです。

さあそこで、この阿彌陀さまと一人のわたしです。わたしのことは普通は凡夫といいます、だから佛と凡です。阿彌陀さまは、わたし達に向かって「我が名を称えよ」と、このようにお呼び下さっています。呼び掛けでございます。その呼び掛けに應えて「南無阿彌

陀佛」と、お念佛を申す。お応えをする。阿彌陀さまからいいますと、まず「我が名を称えよ」と、このわたし達一人一人に向かって、呼び掛けて下さる。その呼び掛けに応えて、「南無阿彌陀佛」と貴方の御名を称えます。鸚鵡返しに「念佛せい」というから、念佛を申す。ただそれだけなのです。今度は、この南無阿彌陀佛の声に託して、声に乗せて、「何卒、このわたしを、護り、導き、お迎え下さい」という、その切なる思いを「南無阿彌陀佛」の声に乗せて、阿彌陀さまをお呼びする訳です。そうしますと今度は、阿彌陀さまはその声を訪ね、その思いに應えて、救いの手を差し伸べられる。これは応の方です。

このように見ますと、お念佛、南無阿彌陀佛と貴方の御名をお称えをする私を出発点とする呼と、それにおこたえ下さる阿彌陀さまを出発点とする応の二重の關係ができてきます。

この二重の呼応關係の上に、浄土の信仰が成り立つ訳でございます。丁度そのお歌が、この「月影」のお歌であると。このようにわたしは受け取らせて頂いておるわけでございます。

前半の「月影のいたらぬさとはなけれども」ということは、お念佛申すお方も、お念佛を申さないお方も、無關心なお方も、全部、同一平等に、阿彌陀さまの光明に攝取されている訳です。だから関心のないお方、反発をする人も、在るかも知れませんが、そういう人には、阿彌陀さまの光明に、抱かれているというような、そういう自覚がない訳です。ないけれども、ちゃんと抱かれている訳です。ところが南無阿彌陀佛とお念佛を申す、人にだけその阿彌陀さまの光明が、太陽の光も、月の光も、差し込まない、心の奥にまで差し込んで来る。そういうように見ますと、後の「ながむる人の 心にぞすむ」というの

が、この心の光であるということになるわけです。

つまりこのようにして法然上人が『選択集』を作られるについては、選択義を立てられたのです。八種の選択、三重の選択義、これは、『選択集』の一番最後の第十六章のところに、この二つの選択義が述べられております。佛さまがわたし達のために、特別に選ばれたもので、阿彌陀さまが四種類、お釈迦さまが三種類、六方の諸佛が一種類と、浄土の三部経を踏まえ、更には般舟三昧経というお経を踏まえて、八種類の選択義をお立てになったのです。その一番の大本は、第十八の「念佛往生の願」でございます。これを盛り立てるために、法然上人はわざわざ三部経と、般舟三昧経によって、八種類の選択義を立てられたのです。

阿彌陀さまは「南無阿彌陀佛と我が名を称えよ」とわたし達に向かって、呼び掛けられています。そのお念佛によって阿彌陀さまは「こうこうだから、間違はなく、わたしが、貴方をみんな我が下に引き取るぞ」とおっしゃり、お釈迦さまはそのことをわたしに、この世に生まれて悟りを開いたのは、阿彌陀さまのこの「我が名を称えよ」と仰せになった、そのことを後世に伝えるために、わたしは「悟りを開いたんだ」と申しています。だから「南無阿彌陀佛」とお称えすることは、お釈迦さまの「出世の本懐である」といえるのです。天台宗までは「お釈迦さまの出世の本懐」と仰せになる場合は、法華経を説かれたということになります。わたし達浄土宗からいえば、お釈迦さまの本懐は、阿彌陀さまが「我が名を称えよ」とお説きになった、そのことを後世の皆に伝えるために、わたしはわざわざ、この世に生まれて、出家をして、修行をして、悟りを開いたんだということになるのです。

六方の諸佛は、その一つの方向に、東方なら東方に無数の、佛さまがおいでになる。それが、六方でございますから、もう無数の無数で、その無数の佛さまが、声を揃えて一時に、お釈迦さまがお説きになった、阿彌陀さまのお名号を称える者は、みんな間違いない、往生浄土が出来ると言うことはそれは間違いないと、証誠された。口を揃えて一時、阿彌陀さまの尊いお広い御心が、阿彌陀さまだけじゃないんだと、六方の諸佛もお釈迦さまも、みんなで後押しされておるわけです。その御心を八種の選択によってお示し下さったのです。

それを頂戴するについて、佛教を聖道、浄土の二門に分けて、その中でしばらく、聖道門を差し置いて、浄土門に入りましょう。浄土門に入ったならば、あらゆる沢山の行の中から、しばらく雑業つまり阿彌陀さまの本願の御心じゃない行はなげうって、阿彌陀さまの心になう行、五種を実践しましょう。これが第二重。そして第三重になりますとその五種の中で、一番大事な阿彌陀さまが第十八の願に誓われた、称名をもつて往生の正しい、まさしく往生が決定した業である正定業、これを往生の業として実践しましょう。これはわたし達が選んでいく、選ぶといいますが元は、阿彌陀さまがちゃんと選んで、私たちに与えられておる訳です。そういうように、佛さまからわたくしの方に呼び掛けられる、その呼び掛けを頂戴して、呼び掛け通りに声を出して、阿彌陀さまのお名前を呼び続けながら、「何卒至らないわたくしを、護り導き、お迎えを頂きとうございます」と、切なる思いを、南無阿彌陀佛の声に託する訳です。その、「南無阿彌陀佛」の声を聞こし召して、その切なる思いに応えて、救済の手を差し伸べられる、これだけのことが月影のお歌の中に、ちゃんと収まっておる訳でございます。

(以下次号)

法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

菩提寺修学

法然上人は父の遺言に従い、近在の菩提寺の観覚得業の許で出家の準備のため、仏教の修学をすることになった。この絵は菩提寺で法然上人が観覚得業について修学している場面である。両者の手許に本がないところを見ると、当時の慣例に従い、観覚得業が法然上人に口うつしに講義しているのであろう。法然上人は観覚得業から仏典ばかりでなく、一般の学問をも学んでいた。この絵伝の詞書によると、「聡明利智にして、一を教うるに万を知る、ただ人にあらず」と記されている。法然上人の聡明さを認めた観覚得業は、法然上人の将来を期待して、田舎の自分の手許で修学させるよりも、当時の一流の僧侶が修学している比叡山に登って勉学することを勧めた。観覚得業が法然上人に比叡山行きを勧めたことが、後年の法然上人の浄土宗の立教開宗に繋がるのであり、観覚得業の先見性に敬服すべきであらう。

この絵伝では、これを天養二年（1145）法然上人十三歳の時の出来事としている。典拠は明確でないが、法然上人の生誕年次を考える上で貴重な記述である。

(宇高良哲・大正大学教授)

吉水流 詠唱の あゆみ

浄土宗宗歌

「月影」の

できるまで



松濤基道先生

シリーズ
詠唱

岐阜・円心寺住職

松濤基道

仏教の声の讃歌はインドにおける梵讃、中国の漢讃、日本に来てから日本語での和讃ということになります。ですから和讃というのは相当古くからあるのです。ご承知のように浄土真宗では、和讃をお経として日々お勤めに唱えています。これをみましても、梵讃、漢讃はもとより、和讃というものは仏教の傳來発展とともにあるわけです。

特に今、私たちのこの吉水流詠唱が確立するまでには、いくつもの復興期がありまして、仏教を盛んにしようという機運の中で詠唱が一人前になってきたのです。

その最初の一つは鎌倉期の和讃。教化という名前で、お勤めの後に、今で言えばお説教風なものに節をつけたようなものがあつたわけです。そういうものが一つの源流になってくるのです。

ところが一方、五七調とか七五調という言葉のリズムということは奈良時代からあるわけです。『古事記』は非常にリズムミカルに物

語っています。そういうのが日本にはずっとありまして、それが特に平安期に、中国との国交が絶えたということが、日本の歴史の中の文化を熟成させました。これが二度あつたと私は考えております。最初は平安期、二度目は江戸の鎖国。その中で和讃系統のものが非常に発達してくるのです。ご承知のように、恵心僧都源信を初め多くの僧侶たちが、口調のいい言葉で仏教の教えを説かれたわけです。

和漢朗詠、つまり漢詩に節をつけて朗詠する。それから日本の七五調、五七調も節をつけて歌うという動きもあります。その名残が歌会始めの朗詠です。あれは京都の藤原定家の冷泉家^{れいぜん}に伝わっている冷泉流と称するものです。そのもとは平安期の日本の文化が熟成した次代の名残りだと思えます。

浄土の教えを説いた法然上人は、非常に和歌がお上手でした。従って法然上人の御作が、勅選集とか世間に通る和歌集の中に選ばれて

いるわけです。そういう和歌というものを通して元祖様が浄土の教えを説かれた。ただ一つ、七五調で説かれたものがあるのです。それは当時の流行歌、「今様」風に歌われたと言われています。元祖様はほとんど五七五七七の和歌調で説かれました。その中の七五調のもの、それが「生けらば念仏」なのです。だから、既に元祖様の時代にそういうものがあつたわけです。

鎌倉期から室町期は世の中が相当動乱していましたが、落ちついた文化というものが育っていくことが少しはあつたのです。ようが、それほど目立ってなかったわけです。それが本当に実ってきたのは江戸時代だと思います。鎌倉時代末期から安土桃山時代に入ってきた東洋・西洋の文化を、江戸時代の鎖国が体系的にまとめる働きを果し、そして完成したと思うのです。

弘法大師信仰。それに類するものが江戸時代には幾つかあるのです。地藏信仰であると

か、観音信仰、阿弥陀信仰。もちろん阿弥陀の信仰は平安時代からありますが、ある団体がある旋律を歌うことでお互いが心を通じ合えるということが、江戸時代において大衆に定着したのです。弘法大師の信仰、霊場巡りという形、観音信仰、三十三観音とか、六地藏とか、そういう組織だって、みんなが同じテーマでお唱えをして信仰の旅をするという形がしっかりと育つたのは、室町期にその芽生えはあると思いますが、本当に組織として固まったのは江戸時代だと思うのです。

そういうことを土台にして考えますと、そこに今度は浄土宗が教化という面で、こうしたお唱え、歌を取り入れたのは、私はキリスト教との関係が非常にあると思うのです。キリスト教は新しい形で布教をした。歌を歌うということ、日本の仏教徒にはとても目新しい教化に映ったと私は見ているのです。

それは讃美歌です。だから、日本人もそういうものにだんだん耳なれてきていた。そこ



浄土宗詠唱の生き字引
きともいえる松瀧先生

で仏教徒はと考えたときに、我々が従来どう
いうことをやってきたか。そしてそれより、
もう少し新しい教化を、という物の見方がだ
んだんと起きてくる。それがはつきりするの
は明治になってからです。

口を揃えて唱えるというような形ではな
く、今まで仏教はどちらかというと聞かせて
もらう形でした。称名にしても、一般の人々
は称名を聞いて、ああいいな、と思うけれど
も、自分も唱和するところまではいかなかっ

たのです。ところがキリスト教はそうではな
かった。いわゆる参加型です。これは新しい
行き方だなということから、仏教徒にも影響
を与えたと私は思うのです。

それが一つのしつかりした形になってくる
のは、明治の中頃です。キリスト教の布教を
明治から正式に政府が認めたのです。そうす
ると今度はキリスト教が大手を振って教化を
始めたわけです。それに対して仏教徒は一つ
の脅威を感じたと思うのです。布教であとい
うことをやっている。仏教もおちおちしてお
れんど、と。それが明治二十年代です。ちょ
うどそのころ、日本でも音楽教育が上野の音
楽取調所、今の芸大のはしりですが、そこに
伊沢修二さんとかがいraftしやつたわけだ
す。美術のほうでも岡倉天心というように、
いろんな方が出られて、新しい物の見方、芸
術の見方をされたのです。

浄土宗では、関西に大阿弥陀経寺の先代様
か先々代様で、知恩院のご法主になられた岩

井智海親下が音楽取調所にご縁があったか、あるいは伊沢先生について学んでいたらしいのです。キリスト教がこういうふうな布教の仕方をしてゐるのに対して、各仏教教団はこのままでいいのか、と。特に排仏毀釈ということが少し前にあった。その排仏毀釈で仏教徒は大打撃を受けたのです。これはただごとでない。我々もしっかり教化をしていこうと、それで「月影」ができるのです。あれは明治二十年前後なのです。私は東京花川戸の九品寺荻野正順上人より、自分の家に先代の資料があると伺っています。要するに、「ミ、ミ、ソ、ソ、ラ」というあの節は、一つの歌がありまして、その歌の部分を取って「月影」にしたわけです。

キリスト教に対して仏教も新しい行き方でいこうという機運があったわけで、ただし、西洋はド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ドの七音、ところが、私たちのお経でも、東洋の雅楽でも、これは五声音なのです。その五声

音の歌を、伊沢修二さんが音楽取調所でいろいろ研究しているときに、ド、レ、ミ、ファを一、二、三、四に当てはめるとファが四番目、ソ、ラ、シのシが七番目ですから、我々の音楽は四と七がない五声音階だからと、「よ（四）な（七）抜き音階」だと、その時代でもきちんと調べているのです。

そこで、私たちの歌は東洋の特徴を出したほうがいい、だから、「月影」も「よな抜き」の東洋の五声音階でまとまっていって、雅楽で演奏できるわけです。

当時、仏教界が寄り添って、一宗一派がではなくて、各宗が「ミ、ミ、ソ、ソ、ラ」の節で、それぞれのゆかりのある歌を宗の歌としてこれから歌っていきましよう、と取り決めたのです。それをまじめに行って今日まで伝えているのは、浄土宗と天台宗だけなのです。こうしたように排仏毀釈の後、仏教各宗派がキリスト教の影響を受けて、それまでの反省に立って新しい運動によって教化しよう

という経緯があったわけですから。これがまず第一期なのです。

ところが、その後、日本の国内が変貌しました。それは明治二十七、八年の日清戦争。十年後の明治三十七、八年の日露戦争。戦争となるとどうしても文化運動とか宗教活動がおろそかになるというか、後回しになる。あるいは弾圧があったりといろいろな問題がありました。それで大正、昭和になってくるのです。

ここにまた一つ、大正時代からの復興期があります。お釈迦さまの誕生を祝う降誕会を「花祭り」と言って、民衆の中にお釈迦さまの誕生を意識づけようとした運動です。このことはみんな古いことだと思っているでしょうが、実はそんなに古くないのです。東京に各宗の坊さんが集まって、お釈迦様の誕生日を、花祭りという名前にして仏教の復興運動としたのです。それをリードしたのは渡辺海旭師などの浄土宗の坊さんです。そういう新

しいことについては、いつも浄土宗がリーダーだったのです。

その運動がだんだん結実して、大正の末から昭和の初めに各宗の主だった人が集まって文部省の中に仏教音楽協会というものができます。ここに渡辺海旭師とか八百谷順応師の名前が出てきます。浄土宗も活躍して仏教復興の気運となったのです。

そこで、仏教聖歌の楽譜を十何冊出します。十数冊出して、また戦争となってしまう。いつも戦争で私たちの運動はしぼんでしまうのですが、そのあたりが詠唱の素地になるのです。

大正の初めというのは浄土宗が福祉で活躍した時代です。矢吹慶輝師とか長谷川良信師とか渡辺海旭師とかみんな福祉で名をなした方々です。そして児童教化、日曜学校、これが明治の末から大正時代にかけて、とても盛んになるのです。特に大正大学は、ほかの仏教系の大学をリードしていました。

中でも詠唱と関係深いのは、文部省の中にできた仏教音楽協会を、高楠順次郎先生とか高野辰之先生といった日本の学界のそうそうたるメンバーが中心になって、引っ張ってくれたことです。音楽では田辺尚雄先生とか、童話作家では巖谷小波先生たちもよくお集まりくださった。それから藤井制心師、この方は東本願寺系の坊さんで作曲の先生。日本的に有名な方では、盆踊りをつくった藤井清水先生という方、それから学習院の音楽の先生で小松耕輔先生、窪川旭丈師ももちろんこのメンバー。それから北原白秋先生、作曲家では山田耕筰先生とか、みんなメンバーなのです。私がなぜそれを知っているかというと、青山に日本青年会館というのがあって、そこが毎年聖歌新作発表の会場だったからで、そこで、私が大正大学の日曜学校の生徒を連れていって、新曲発表の子供の歌を指揮して演奏したのです。一番最初に発表したのが花祭りの歌とか、朝の歌、「朝だ、朝だ……」とい

う朝の歌。それが第一回で昭和四年です。それから、常盤先生作詞、小松耕輔先生作曲の「言葉たくみに」とか、聖徳太子讃仰の歌とかで、一番端的にアピールしたのが、「ハァー 盆はな……」という「盆踊り」という歌なのです。

このメンバーに八百谷順応先生がいます。信濃町の浄土宗寺院二行院の住職です。この方が仏教音楽協会の有力なメンバーだったのです。これからは古い時代に仏教音楽として親しまれたご詠歌とか和讃とかを浄土宗的にやろうじゃないかという運動を、仏教音楽協会ができた昭和四、五年に始めたのです。これが私たちの詠唱運動の先駆けなのです。

昭和の初期からそういう運動があつて、浄土宗でその中心になったのが法式の研究者の八百谷先生とか、千葉満定先生とかいう方たちです。関西からは板倉貫瑞先生がおいでになったとも聞いています。そこで八百谷先生が非常に新しい考えでご詠歌、和讃というも



資料にあたる松濤先生。手前は池上靈心先生。奥は北川良祐先生

のをやり出した。「本願節」というレコードなんかも出したのです。

八百谷先生はそのほかにもいろんなことをおやりになりました。「稚児の踊り」もそのひとつです。お稚児さんの踊りで日中礼讃に振りをつけて、法要の後にみんな、主に子供さんたちが踊ったのです。そういうような新しい仏教の音楽運動を始めたのです。それが土台にあったのです。

もう一つ、その影響を非常に受けた方が板倉貫瑞先生です。この方は京都からおいになつていたけれど、八百谷先生のやり方を非常に理解していました。だから池上靈心先生が中心になつて知恩院での詠唱奉納をお願いしたときに心よく承知されたのです。今までの古い伝統の知恩院の法要の中に詠唱を入れることを許可してくれたのです。

そういうことが原点にあつたのですが再び、第二次世界大戦で私たちの仏教音楽運動はボシヤったわけです。私はそのときに二つ

のことを考えていました。

要するに仏教音楽というからには、先ほどからいう東洋の五声音階を大事にしなければ、仏教という意味がないということ。なぜなら民族の心の中にある音階ですから、それを大事にしなければいけないからです。それと、これからの世の中は五線譜でやっていかなければ世界に通じないということです。昔の博士譜でやっていたのでは、そのグループの中ではいいけれども世界性がないのです。

五線譜で表しますと、洋楽と誤解をうける心配はありますが、やはり五線譜に長所があります。

音楽法要も、五線譜化した偈文の譜面で、華頂の生徒さん・佛専の生徒さんその他の百名のメンバーで、終戦直後の昭和二十一年九月に、知恩院大殿からNHK全国ラジオ放送

したのです。こういう私の運動と、もう一つの詠唱（吉水講）教化運動を五線譜を採用してやっていこう、と。この考え方を非常によく理解してくれたのが当時浄土宗の数学部長の吉水智承先生です。なぜ理解してくれたかという、やはり八百谷先生のやっていた運動があつたことと、終戦直後のすさんだ時代に、これでいこうと里見達雄先生も承知されて、宗会で議決されたからなのです。

浄土宗は、昭和二十一年八月一日に「詠唱司検定・教導司検定・吉水講に関する規程」が制定されました。ですからこのことをもって浄土宗の詠唱が始まったと理解することが正しいことだと思ふのです。ですから今年は浄土宗詠唱設立五十五周年になります。この五十五周年ということを、ここではつきりと申し上げておきたいと思ひます。（談）

コラーゲン Q&A

A ③ A ② A ① Q

コラーゲン優芳は他とどこが違うのですか？
 高橋周七博士の大学の老化防止の研究で生まれました。
 この研究は先進八カ国（日、カナダ、米、英、独、仏、
 伊、豪）で特許取得済みです。
 単なるコラーゲンのみより、杜仲葉、高麗人參を加味し
 た三位一体のコラーゲン優芳舞ははるかにすぐれている。

◆おすすめしたいかた◆

若さ（老化）、
 肌荒れ、肥満、
 目覚めの悪さ、
 ハードな勉強、
 仕事、運動、運転
 旅行の疲れ、
 ゴルフ、テニスなどスポーツ
 の記録が気になるかた。

コラーゲン優芳舞

内容530mg×90粒
 1ケース、1日3粒、1ヶ月分
 ￥5,800（3個の場合）
 （1個￥4,800）

申込先（有）優芳舞

☎0120-00-7836

FAX047-448-8166

梅窓院文化講演会

『環境問題と仏教の役割』

講師

北野大教授

日時

平成13年4月19日（木）
 開場17時30分／開演18時から

会場

梅窓院祖師堂

港区南青山2-26-38

営団地下鉄銀座線外苑前南口1a徒歩1分

問い合わせ

青山文化村 ☎03-3404-8588

略歴

北野大（まさる）教授

1942年東京都生まれ

1972年東京都立大学大学院博士課程修了工学博士
 1996年淑徳大学国際コミュニケーション学部教授
 専門は、環境工学、リスクコミュニケーション

読者の方を抽選で20名ご招待しますので、参加希望の方はハガキに氏名、住所、電話番号、記入の上4月12日必着で編集部までお申込下さい。

申込先 105-0011港区芝公園4-7-4明照会館
 月刊『浄土』編集部

主催
 梅窓院

後援
 法然上人鑽仰会・月刊『浄土』
 浄土宗東京教区城西組青年会

企画
 青山文化村

寺院紀行

東京・江戸川

明福寺

撮影／タカオカ邦彦
文／真山 剛



ルンビニー学園の園庭で園児に囲まれる福井住職。仏教保育は住職のライフワークだ

本誌が読者のお手元に届く頃、桜前線はどの辺りまで上っているのだろう。東京の江戸川周辺は満開近くの花見頃だろうか。

さて、このあいだ日本テレビの「知ってるつもり!」という番組を見た。一人の人物をドキュメントタッチで見せる番組で、取り上げられていたのは浄土宗を開かれた法然上人であつた。

当日の朝、テレビ欄でこの法然上人の文字を見て、『浄土』の発行元がまさに法然上人鑽仰会であることを思い出した。テレビはあまり見ないのだが、その日は万難を排し、テレビの前に座った。

法然上人の念仏の教えが、どれだけ当時の人々の心を癒したのか。映像という媒体のせいもあるが、涙もろい私は感涙にむせびながら法然上人の偉大さを改めて認識し直した。そして同時にその法然上人に絶大な信頼を寄せた親鸞聖人との師弟関係にも大いに興味が湧いたのである。というのも今回訪れた名刹、明福寺が親鸞聖人二十四輩巡詣記の一つに数えられる浄土宗寺院だったからである。

浄土宗明福寺の正式名称は天川山寂光院明福寺といい、創建は文明年中（一四六九〜一四八七）。といってもこれは徳与^{あきと}笈公和尚が浄土宗寺院として創建し直した年である。実はこの明福寺にはそれ以前に二百五十年近い浄土真宗寺院としての歴史があるのである。しかも、浄土真宗寺院としては別格になるような親鸞聖人の旧跡という、由緒ある寺院としてである。



親鸞堂の内陣。毎年五月の報恩講では芝三田の真宗本願寺派の東光寺住職が導師を勤めていた。

嘉禄二年（一二二六）の六月、常陸国笠間郡に隠居していた親鸞聖人は京都に戻る道すがら、下総国葛飾郡の下蒲田村を通る。明福寺のある、現在の江戸川区江戸川である。おりしもの炎暑を避けるため、池のほとりの柳の下に腰をおろした。と、そこに一人の老翁が現れ、何やらぶつぶつ嘆き事を言いながらぐるぐる回り始めた。その老翁に聖人が問うと、日照り続きで人民が餓死する恐れがある。されば聖人、人民を哀れと思うならば雨乞をしてくれないかと懇願した。そこで聖人、西に向かい礼拝合掌し、経文を称えんと雷轟き、大雨が降り始めた。大地が潤い老翁は歡喜した。そして氣付けばはや日暮れ、聖人ここで一夜を明かすが、夢に先ほどの老翁が現れ、この地に足を留め衆生を引導し念仏弘通したまえ、と告げる。目をさました聖人、夢告した老翁が近くのお堂の毘沙門天の化身と悟り、そのお告げにしたがわんと、その池のほとりに草庵を結んだ。

これが浄土真宗の寺院としての由来である。そして三年の滞在中に聖人が袈裟を松の木に掛け、池に身を映し自分の像を彫ったのだが、その聖人が身を映した池と袈裟を掛けた松が、明福寺本堂裏手の鏡ヶ池と袈裟掛松である。

この袈裟掛松は江戸名所図鑑などにも出てきて、武蔵風土記では二代目と記されているが、現在は三代目になる。また聖人が自ら彫った像は、一体は親鸞堂に今も安置され、もう一体は四国香川の善

出羽三山巡拝の碑。明福寺はかつての交通の要衝にあり、各種参拝の拠点として多くの人々が訪れた



佃観音堂。子育て観音が祀られ、例祭は太子祭と一緒に四月に行われている

通寺まで信者の武士が背負って参詣し、現在は普通寺の親鸞堂に祀られている。昭和二十七年には、その像に彫られている下蒲田明福寺を確認するため、普通寺からわざわざ使者が遣わされている。

さて、現在の明福寺の親鸞堂は山門から少し入った奥の右手だが、関東大震災で倒壊するまでは左手すぐの所にあつた。八間四方の本堂並の立派なお堂で、旧都内の門徒による講が組織されていた。年に一度の報恩講には、深川から船をつらね、明福寺門前の江戸川の船着き場は降りる門徒に溢れ、大変な賑わいだったという。田んぼの中に建つ寺に大勢の人が集まると、地元でも「しんらんさんのお祭り」と呼び、農作物や草団子などが門前に並んだ。残念ながら、数年前から講元の事情で報恩講は中止されているが、明福寺ならではの歴史がこうして今に息づいているのである。

この由緒を振り返り、「親鸞聖人の旧跡を浄土宗の寺院として復興させたことに大きな意味を感じます」と明福寺第三十世福井豊信住職は言う。法然上人を師と仰ぎ、もし法然上人にだまされて地獄に落ちようと本望、といった親鸞聖人だが、こうしてその足跡を法然上人の教えを継ぐ住職に守られているのは、なにやら浄土教の二人の宗祖の師弟関係の深さを感じる。浄土宗、浄土真宗の垣根を越えて、「すべての人が救われる念仏の教えが実践されている」と法然上人、親鸞聖人もきつと微えでいられるに違いない。

歴代住職の墓。現住職の住職正式就任は、昭和三十年。その時、昭和になつては五代目の住職だった



話しを桜に戻そう。この四月、東京芝の大本山増上寺で御忌の法要が営まれる。御忌とは、簡単に言うと法然上人を偲ぶ法要、法事だが、その御忌の唱導師として明福寺の福井住職が大殿で導師を務められるのである。本山の住職のことを法主台下と呼ぶそうだが、増上寺の法主台下にこの二月から東京世田谷大吉寺の成田有恒住職が就任された。成田台下の筆名は寺内大吉。そう、直木賞作家である。その成田台下より二年歳下の福井住職は御忌唱導師を受けられたことについてこう語られた。

「もう十年前にやれていれば良かったのですがね。だいぶ歳をとったから、身体が動くかどうか」

こう言われるものの、毎日、境内にある幼稚園と保育園の園長先生として活躍をされ、江戸川フィルハーモニーオーケストラの団長を勤め、教育委員会でも活躍、と多忙な日々をこなされている。

あいにく御忌唱導師の当日、四月六日は小学校の入学式で園児全員は連れていけないものの、園の行事として年中さんと年少さんの幼児全員に参加してもらう予定だ。この行事に参加してもらうことで、子供たちやお母さんたちが何かを感じてもらえれば、というのが福井住職の想いである。仏教保育をライフワークにしてきたと明言される住職だけに、自分の身体を心配する一方、園にとって記念すべき行事になるかもしれないという想いがあるに違いない。福井住



子供たちは、必ずお釈迦さまの誕生仏に
手を合わせ、お辞儀をしてから登園する

職にとって仏教保育は、まさに生涯をかけた一大事業であり、夢でもあるからだ。余談だが、当日は来賓として日本仏教保育協会の上村映雄理事長（曹洞宗）ほか、各宗派の理事が正装で参列される。

住職の仏教保育の拠点は、昭和二十七年発足の明福寺ルンビニ学園幼稚園・保育園で、かつての親鸞堂跡にある。取材で明福寺を訪れたのは朝八時過ぎだったが、しばらく境内を散歩していると、お母さんと一緒に通園する児童が来た。次つぎとやってくる。そして、ライオンと象の絵が描かれた二台の通園バスが着く。バスから勢いよく飛び出した子供たちは、園舎に向かう前に入口脇のお釈迦さま誕生仏に手を合わせ、そして園庭に駆け出していく。

仏教保育を前面に打ち出すこの明福寺ルンビニ学園幼稚園・保育園は児童数四百人。入りたくても定員制限で入れない子もいる程の人氣だ。寺のすぐ前を流れる江戸川を越えれば千葉という立地で、寺の周辺は住宅だらけとはいえ、少子化がいわれる中、すごい園児の数である。というのも、子供が小さい時は江戸川に。といわれるほど、実は江戸川区の幼稚園、保育園の人氣は高いからである。

江戸川方式といわれ、全国が注目するこの地域ならではの経営方式はもちろん、明福寺が実践する幼稚園児と保育園児と一緒に遊ばせる方式は、この業界では有名で、多くの幼稚園や保育園の先生たちが見学に来る。これは、公立を増やさずに私立を援助する方針を

取り入れた区の英断、また園児はもちろん先生も幼稚園、保育園で区別しない明福寺方式など、その理由を詳しく述べる紙面はないが、ともに福井住職が区教育委員長時代の賜である。

福井住職は大正十三年、滋賀県の浄土宗寺院、常福寺に生まれた。父であり師僧でもあった川添豊僊師は説経師として名を馳せた人で、数日に及ぶ説経の最終日、法然上人の命日に七十五歳で亡くなった。その長男として住職は育ったが、大学は京都の佛教専門学校ではなく東京の大正大学を選んだ。学部は東亜学科。浄土宗を代表する僧侶で、増上寺の法主もされた椎尾辨匡師が戦前に創設した学科で、東南アジアへの仏教伝搬を学ぶ学科だったが、戦後すぐに無くなってしまった。しかし、椎尾先生の「日本がこれからすべきは教育である」という理念に福井住職は感銘を受けたという。

大学卒業は昭和二十一年、帰郷せずに知人の紹介でモダンダンスの世界に入る。その後、東宝芸能部に籍を置き、ムーランルージュで振り付けの指導をしたり、照明を担当した。そうして昭和二十五年、東京に住職を求めている寺があると聞き、故郷、滋賀に帰らないことを決意。父に手紙を書いた。跡取り息子の長男からの手紙に父は一晚悩んだが、翌日、わしの法脈が東京に広がる、と息子の願いを聞き入れた。滋賀の寺は次男が継ぐこととなった。

心置きなく、住職は戦災を逃れた明福寺に入る。滋賀の農村地域

親鸞堂はお母さん方のコーラスの練習場としても使われている



の寺で生まれ育った自分だけに、田畑に囲まれたこの寺なら何とか檀家さんともやっていけるだろう、という判断からだった。

当時の明福寺はそれまでの地主寺から変わったばかりの頃。十町歩あった境内のうちの三町歩を近隣の寺に買ってもらい本堂を建て直したものの、残りは農地解放で無くしてしまった。明福寺に入った時に檀家さんからこう言われたという。「何でこんな時に明福寺に入るんだ。今までなら檀那寺だし、地主さんだし、遠くからでも住職を見つければ土下座して拝んだのに、今じゃ、もうしねえよ」と。

そうした中で住職が最初に始めたのはバレー教室。生徒の多くは子供たちだった。これが住職と子供たちとの最初の出会いとなった。これがきっかけで、住職は幼児教育に力を注いでいく。仏教を基本にした教育改革の研究会を東京大学持田栄一教授と増上寺を会場にして作ったり、欧米にも視察へ行った。良き仲間、良き理解者にも恵まれたが、それは住職の幼児教育への情熱があつてこそである。

喜寿を迎えた今年、住職は年賀状に改めて法然上人の「智者のふるまいをせず」という言葉を引用された。その思いとともに法然上人の御忌唱導師をされる訳だが、この御忌が、園児や保護者にとつて心に残る行事になることはもちろん、喜寿を迎えた福井住職にとつて幼児教育の専門家としての一つの記念碑となることも間違いないだろう。

(ルポライター)



歯切れ良くお話いただいた福井住職。優しい中にも厳しさを忘れない人柄だ。

悪をしのばんために、たとい心におもうとも、ほかま
ではあらわじとおもいて、おさえん事は、すなわち
ほとけに恥じるころなり。とにもかくにも悪をしの
びて、念仏の功をつむべきなり。

【十二箇条問答】

悪事を止めるため、たとえ心に悪い思いが浮
かんできてもそれを表に出すまいと自制する
のは、いたらぬわが身をみ仏に恥じ入る心の
表れです。とにかく、悪事を止めお念仏の功
徳を積むべきなのです。

私の砦 とりで

昨年あたりから、法然上人への脚光がにわかに強くなってきています。有名作家による著作が立て続けに発刊されたり、ついひと月ほど前にはテレビの一時番組でも取り上げられました。時代の要請なのでしょうか。

多くの人々がその番組を視、そしてさまざまに感想をもたれたようです。筆者としては、細かい部分を除けばよく編集されていたというのが率直な感想です。特に、「還愚^{げんぐ}」という、上人が唱えてやまなかった凡夫のありようが、そのままの言葉で取り上げられていたことには好感が持てました。還愚の念仏——自分のいたらなさ、弱さ、愚かさをよく認識し、素直に念仏を称えて阿弥陀仏にお救いいただく、という上人の念仏思想の根幹に大勢の人が触れることができたのですから。

さて、番組中、いみじくもゲストの一人が「念仏だけでいいと」単純にしたおかげで、随分怠けた奴もいただろう」「(平重衡が上人に教えを請うた場面を見て) やりたい放題やってきて、最後に仏さ

んに尻ぬぐってもらおうってのが気に入らねえ」とコメントしてくれました。ちよつと荒っぽいものでしたが、視聴者に思索と理解を促そうとした編集サイドの意図を垣間見たような気がします。

なるほど、おっしゃるとおりかもしれません。事実、「一念（一遍の念仏）で救われるのだから悪事もはばかりなし」という極端な、いわゆる「一念義」と言われる教えを掲げては人々をたぶらかす弟子も現れ、なかには上人から破門された者もいました。

どうせ救われるのなら、悪事をはたらいたって関係ない――

人間の自分勝手さ、横柄さ、そして弱さをまざまざと見せつける解釈。ともすると、日常のあらゆる場面、状況においてこれと似たような解釈をしたがる私たちです。

「愚かな凡夫なんだから仕方ないじゃないか」

そんな声も聞こえてきそうです。しかし、それは「還愚」をはき違えた悪い意味での開き直り。「結果のみ重視、過程無視」の考え方は、その「考え」をめぐらす「私」という存在――一番大切に愛し

いはずの——をまったくないがしろにしていると言えるでしょう。

悪い考えが浮かんで、それを行動に移そうとしてしまうことも、やむにやまれず犯さざるを得ない状況も多々あるでしょう。が、それを自制、懺悔するのと、はじめから悪事を悪事とも思わず「結果オーライならお構いなし」とするのでは天地ほどの差があります。ここを分けて考えないことには、人としての基本的道にもとると指摘されても何ら反論できません。それを「還愚の思想にたがう」「半自力だ」などとする中傷は、全然、的外れと言わざるを得ません。

凡夫なりの賢明さ、凡夫だからこそその謙虚さを守りたい——この一線こそは、「私」が「人としての私」であり続けることができるか否かの砦なのだと思います。「恥じ入る」思いがなければ、仏の慈悲にはついぞ気づくことはないでしょう。

(小村 正孝)

連載

『くすり箱』③

春の薬草(タンポポ)

薬剤師

市川真人

春の野草の代表的なものにタンポポ（漢名Ⅱ蒲公英）があります。このタンポポ、じつは漢方薬の薬味（材料）としても、民間薬としても使われる代表的な薬草です。

日本中どこでも春を感じられる頃になると、足元の土手や道傍、家の庭、畑などでタンポポの黄色い花がどんどん咲き出すのを見ることができます。

「タンポポが早く咲きだす年の春は短く、遅く咲きだす年の夏は日照り」などの諺も聞いたことがあります。こんな諺からもわかるように、庭や畑などにたくさん咲くタンポポ等

を、昔の農家の人達は、今後の天候、今年の農作物の出来、不出来、どのように対応し、作業をしたらいいか等の指針にしていたのです。

タンポポという和名、日本名の語源は不明だが、タンポの穂の意で、タンポ（綿を布で丸く包んだものⅡ練習用の槍の先、拓本を採る時に使う）の穂で、花の後の綿のほうけたようなのを見て名付けられたかと思われるます。また、少し昔は多菜、田菜、苦地菜と呼ばれ、若芽を菜として食用にしていました。チクサという別名もあり、茎を折ったり、傷をつけたりとすると、白乳汁が流れ出るとこ

ろから、また、根を煎じてのむと産後の乳汁の分泌が良くなることから名付けられたと思われる。

タンポポの種類はたくさんあり、普通、花は黄色ですが、白色のものもあります。日本には生育地により二十数種のタンポポがあります。エゾタンポポ、センダイタンポポ、カントウタンポポ、トウカイタンポポ、ヒロハタンポポ、ミヤマタンポポ、カンサイタンポポ、シロバナタンポポ等、また、渡来のセイヨウタンポポもあります。セイヨウタンポポは札幌農学校創立当時の先生が米国より蔬菜用に持ち込んだものだといわれています。

現在、日本に西洋タンポポが増えているのは、以前より日本にあったタンポポは、一個体の花だけでは種子ができないが、西洋タンポポは、単位生殖といい、めしべが受精しなくても種子を作ることができ、また、種子が日本在来のものに比べて軽く冠毛も長いので風に乗りやすく、遠くに運ばれやすいからで

す。

☆食用 ★若葉Ⅱ灰又は重曹を加え、湯でよくあく抜きをする。あくが強いのでクルミ和え、辛子和え、バター炒め等濃いめの味付けにするとよい。また、ホウレン草等に混ぜて食べてもよい。★根Ⅱ①千切りにし、キンピラにする。②細かく刻み、乾燥し、炒つてコーヒの代りにする（カフェインがないので子供にも影響がなく、寝る前でも飲める）。★蕾、茎Ⅱ湯通しし、甘酢等に漬ける。

☆民間薬 ★健胃、強壮、風邪Ⅱ根一〇g ★むくみ、尿閉、婦人病、肝臓病、貧血Ⅱ全草一〇～二〇g ★便秘Ⅱ全草二〇g又は根一五g又は花五g ★乳汁不足Ⅱ一五g（餅米、水飴、蜂蜜等と一緒に飲む）（書いてあるgは乾燥した大人の一日量で、水六〇〇mlを加え半量になるように煎じ、1日3回、食間に飲んで下さい）

☆漢方薬★乳汁不足Ⅱ蒲公英湯（タンポポが主薬）を飲む。



『法然の哀しみ』

を
読んで

中野正明

人間の平等性への妥協を許さない平等の精神を中心に首尾一貫した浄土教の思想体系を立てた法然上人（以下、尊称を略す）について、十三世紀という時代においてまさに阿弥陀の慈悲と勢至の知恵を合わせそなえた人間であるとの評価はとくにこれといって目新しいものではないが、それが法然の出自や生い立ちに始まる人生と関係が深く、法然の悪人往生、女人往生などの主張のみなもとが実は父母との哀しい別離、非業の死に求めることができるという独創的な話として展開されるとしたならばそれは非常に興味深い。法然について書かれた梅原猛氏にいま漸くあれこれと批評の声が届けられようとしている。

私のような浅学なものが梅原氏の学問と信仰の結晶のようなこの『法然の哀しみ』（小学館刊、平成十二年）に論評を加えることは到底出来ることではないと執筆のご以来を丁重にお断りしたのであるが、編集担当者が大

学時代の友人であり誼をいわれると承知するしかなく、あくまでも感想文程度のことしか書けないことを条件にお引き受けしたわけである。このようにこの執筆依頼に当惑するのは正直いつて私だけではあるまい。何といつてもかの梅原猛氏の書への論評であるうえに、また書くことになればこの梅原氏の独創的な主張に何らかの立場をもって臨まなければならず、このことは研究者の末席を汚す者にとつて非常に勇気がいるからである。そうした危惧は私だけであろうか、読み進むうちにどういう立場で述べようか随分悩んだのであるが、最後第十二章「悪と二種廻向」並びに終章「阿弥陀の慈悲と勢至の知恵」を読むに及んで心を決した。

私にとつてもっとも刺激的だったのは、「近代浄土教で往相廻向や還相廻向が語られる場合も、その自利の行、利他の行がすべて現世のこととして語られるのである。それで

は少なくとも浄土教の往相廻向、還相廻向ではないのである。浄土教の往相廻向、還相廻向はすべて死後の話なのである。こうして浄土を失った近代浄土教は悪人正機説という現代人がもつとも好みそうなパロックスの説に執着して、それを布教の手段としたのである。」としたうえで、最後に「日本の仏教は江戸時代によってきめられた檀家制に安住して、このような化物の精神、利他の精神をすっかり忘れていたのではなからうか。」と指摘しているところである。法然に悪人正機説の原点があるとする見方が正しいか、親鸞の『教行信証』『証卷』の内容と法然の『逆修説法』あるいは北条政子宛書状、さらには源智造立願文の作善などに共通するものがあるとして、すでに法然の思想に往相廻向と還相廻向との二重廻向の説があったという考え方に無理がないのかについては論証する才覚をもつ者ではないが、法然浄土教においても当然

往生後の浄仏国土のこととその往生のための口称念仏を問題としていることを忘れてはならないのである。

法然のこうした悪の自覚、凡夫往生、女人往生といった平等思想は法然の哀しい人生体験からくるものであるというのが本書の特徴であり、書名の由来といってよい。著者はその論証に持ち前の哲學家としての見通しをもとに、仏教学、歴史学、民族学、国文学をはじめとする多くの分野に亘る該博な知識によって解明を進めている。この論法は著書の真骨頂とするところでも我々凡人のなせる技ではない。そして読み物として世論に大いに歓迎されこれまで親しみにくかった法然との距離をぐっと縮めるといった効果が間違いないと期待される。

ところで、本書の歴史的叙述のうちつぎの独創的な二点について感想を述べておく。一つは著書が『醍醐本』『別伝記』の記述を根

拠として、法然の十五歳登山、十八歳隱遁説を採ることによって、従来より『四十八巻伝』などによって法然九歳の時父時国が敵の夜襲によって討死を遂げた際の遺言によって出家したと言われてきたことを覆す結果になるが、こうした見方は著者が取り立てて発見したかのように論ずるまでもなく、実は拙稿『法然出家の起因について』（『印度学佛教学研究』第四十三巻第一号、平成六年）第一部第一章第四節『「醍醐本」成立私見』（84頁）において指摘したことに関して詳しく論証したものである。梅原氏のように確信が持てるわけではないが、『醍醐本』の史料的信憑性を論じていくなかで自ずと導かれてくる考え方なのである。それが『九巻伝』『四十八巻伝』のように九歳の時父討死に際し告げられた遺言によって出家したという説となっていくわけであるが、それに至る各種法然伝の形成過程を考慮しなくてはならないが、そうし

た手順からではなく著者は両親の出自の問題、岡山県にのこる伝承、肖像画の分析などをとおしていわゆる状況証拠を駆使して外堀を埋め、そのことが実は法然が専修念仏こそ平等救済の教えであることを確信しその布教に人生をささげることになった基礎を成していることを論ずるわけである。

しかし、私はそうした解釈が正しいものかどうかを判断できる能力が残念ながらない。そして恐らく母もこの時一緒に不遇の死を遂げたものであろうとして論じられていくが、その典拠を私は知らない。このように著者の史料の見方、眼力には驚かされるばかりであり、それをまた梅原流の広範な知識によって人生全体のなかに位置付けてしまうその仕業は、些か強引な論調も随所に見られるが魅力的であり、本来客観的でなくてはならないことを忘れてついには読みふけり、著者が抱く法然の世界に引き込まれてしまうのである。

もう一点は法然晩年のいわゆる法難について、とくに建永の法難によって法然が四国流罪となるその黒幕に慈円の存在を想定されたことである。これは普通では考え付くことではないが、元久から建永年間にかけての情勢を『七箇条制誡』『興福寺奏状』などによって分析し、『四十八巻伝』の語る事件の経過を慈円の著『愚管抄』に記される法然への惡意に満ちた冷酷な記事、『教行信証』『化身土巻』による親鸞の見方、慈円の歌集『捨玉集』にある九条兼実と同道家とに送った歌などを根拠として、後鳥羽上皇の寵臣であつて比叡山の僧を動かす地位におりかつ専修念仏の興隆を快く思わず禁止する意志をもっていたのは、天台座主を四度も務め当時宗教界の大立者であり後鳥羽上皇時代最大の権力者であつた慈円その人に違いないというものである。力点の置かれているのが法然の最大の支持者である慈円の実兄九条兼実と慈円との関係に

ついで考証である。これを『愚管抄』の検討と『捨玉集』の歌の内容から分析し、とくに建仁二年（一一〇二）兼実自ら法然を戒師として出家したことが慈円にとつては許すことのできないことだったのであろうと述べられる。そして、兼実と慈円の仲について慈円の弟子となつていた兼実の息良尋の逐電などを例にとり、『愚管抄』の記事と『捨玉集』の歌の分析をとおして二人の確執を詳しく語っている。これらのことによつて一見間違いない説であるとも思われるのであるが、私としては非常に興味のある話ではあるがまだ慎重に受けとめておくにとどめたい。というのも、著者のこの法難の検討の対象がほとんど『四十八巻伝』によつており、重要な根拠として『教行信証』『化身土巻』の記事があるが、この「主上・臣下」とある臣下を慈円とするのは少し行き過ぎた解釈であると言えるからである。これは前後の文意

からして当時閑白を務めている近衛家実をはじめてとする公卿ら全般を指すものであり、たとえば慈円が後鳥羽上皇時代の最大の権力者であつたにしても、この記事を根拠とすることは適当と言えない。また、論証の全般が『知恩伝』の記述中の「異見異学の輩」を専修念仏に恨みをもつ後鳥羽上皇の寵臣、寵僧と決め付けたり、「聊譏臣誤淑情故也」「有誹謗輩致無実讒奏故、忽蒙勅勘被召籠之条、偏佞臣之誤君、如浮雲蔽白日、」などの記事をもとに、住蓮・安榮事件が実は佞臣による無実の讒奏によるものとの前提に立って進められているわけであるが、『知恩伝』そのものの史料的人格からするとこの記事の信憑性をどこまで認められるのか甚だ疑問である。

このように、本書には著者の鋭い洞察力によって種々の興味深い視点が提供されている。例えば法然の肖像画や御影から人間性などを読み取ることにはアプローチされたり、法

然は善導の『観経疏』『散善義』によって『観無量寿経』『流通分』に説かれたことの「どんでん返し」を行つたものと言われたり、善導を詩人として法然を哲学者と評したり、親鸞の著『教行信証』から見た法然を詳しく語られるなど多くを勉強させていただいた感がある。著者の学問の厚さと幅の広い知識に圧倒されるというのが本音である。法然は生涯において著者のいわれるような哀しみを背負つて専修念仏を主唱したのかどうか、本書は清僧「聖の御坊」として尊敬された近寄り難い印象から、法然を人間味あるイメージに変える役割を果たすことになるであろうが、哀しみというよりももっと意志の強い人物像を意味する言葉に譬えたいと思つたのは私だけであろうか。

（華頂短期大学助教授）

記時歳教仏

法然上人の忌日法会は本来、陰暦一月二十五日。後水尾天皇の勅令により、京都知恩院で行われたのがはじめなので、特別に「御忌」と呼ばれます。

明治に入って四月に行うようになり、知恩院のほか東京芝の大本山増上寺、鳥羽安楽寿院、粟生光明寺、永観堂禅林寺などが名高いものです。

冷々と畳広さよ御忌の鐘

清原枲童

春とはいえ花冷えの季節。その感じがよく出ている句です。御忌には桜がよく似合うのです。花見もかねて、などというと怒られるかもしれませんが、

御忌は別名「弁当始」ともいって遊山のはじめともされるのです。着飾って参加するものであるのです。

御忌戻り小袖たたむや京の宿

水落露石

御忌小袖の句です。参詣人が綺羅を飾り、美服を競いあったので、呉服屋はこぞってそれを観察しに来て、その年の流行を定めたというほどでした。

いまだと、たとえばアカデミー賞授賞式の各国有名女優のドレスとか、女性の帽子の流行を決める英国タービーとか、ああいうものに近い感覚なのでしょうか。ちょっと違うかな。

ぎよき 御忌

冬美木々佐

松風に紅裏かへせ御忌詣

松瀬青々

この句もそういつた楽しい光景、華やいた気分を歌っています。ここで語っている御忌はあくまでもかつての知恩院の御忌のことです。長い冬、寒い冬が終り、春の最初の心うきたつ行事として京都の人々は楽しみにしていたのです。

しかし、あまり華美になるのもどうか、という考えもやはりあったようで「木綿たふとぶ法然忌」という句もあります。

法然上人はきつと、いろいろな御忌のあり方に微笑んでいらつしやることでしょう。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●東風

〔特選〕

書き足りぬ地図に迷いし東風の道

中島富士子

市販の地図が描いてもらったものか。

「書」の字だから書き入れが足りなかったのか、あるいは「描」がふさわしいのか判じられないが、困っているのがよく見える。あとで見たら、それで足りていたかも知れない。

〔佳作〕

三尺を離れてあるく東風の中

佐藤 雅子

飽食の鴉群れいる東風の浜

河合富美枝

東風吹くや漁師細目に沖を見る

谷 しげ子

●蓬

〔特選〕

蓬摘みバス停一つ越えて来し

浜口 佳春

道に沿う畑の畦や山裾など、見つけては摘みしているうちに、バス停を一つ越してしまったのである。帰りを急ぐでもなくバスを待

選者=増田河郎子

《特選》

新世紀始まっており風邪癒えず

池田 伊吹

●自由題

つ間だろうか。いつの間にここまでという顔で振り返っているのだ。

《佳作》

蓬餅姑の秘伝を乞いにけり

周東 澄江

蓬餅食ってはじまる同窓会

進藤 英一

取り分ける箸鮮やかに蓬餅

林 史雄

新世紀と言ったところで、人間が勝手に仕切ったものだが、それでも各人共に何らかの思いはある。そういう時に作者は、風邪を引きずったまま世紀を越したのだ。どうしてこんな時かというと思いに違いない。

《佳作》

おのずから無口となりし雪おろし

佐藤 雅子

なごり雪橋立て淡く隠しおり

山本のり子

ひたすら噛む二十一世紀の年の豆

近藤啞々砂

自由題

②季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

東風
東風にのり那須路の旅を思ひけり
刻々と花便り来て東風吹きぬ
東風やさし歩きははじめし児のころぶ
東風吹かば白波眩し堂ヶ島
東風日和いかなこ漁に浜が沸く
東風吹いて魚店にある世事のこと
強東風や病有る身も旅の夢
夕東風や渚に光る海女の魚籠
遅れ来る桜東風かな山の寺
東風吹くや石に立つ鶴の前屈み
強東風や茶髪逆立て沖にらむ
東風吹くと大型船の入る港
東風吹いて閑伽のしづける桶の台

金谷友江
大場清
山本美代子
嶋田喜代子
中島一子
佐藤雅子
周東澄江
河合富美枝
山本のり子
浜口佳春
石原新
山口信子
増田信子

蓬
強き春の蓬を摘みてよもぎ餅
鹿枝の跡や蓬の生初むる
蓬積むことなつかしくてたのしくて
己が影連れに早朝よもぎ摘む
参道にやたら目につく蓬餅
雑草に紛れて蓬萌えにけり
朝摘みし草の香あまる蓬餅
一病と絆深めし蓬摘む
激震の地に蓬萌え早や六年
銘パンの緑ほのかに蓬入り
蓬餅頬ばる喉がぐいと鳴り
保育園児の蜘蛛散ることく蓬原
笑い声絶ゆることなく蓬摘む

金谷友江
大場清
山本美代子
嶋田喜代子
中島一子
佐藤雅子
中島富士子
河合富美枝
山本のり子
大村和代
山口信子
井村喜也
加藤政男

締切・四月二十日
発表・「浄土」六月号
選者・増田河郎子（「南風」主宰）
応募方法
● いずれの題とも数の制限はありません。
● 特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊「浄土」誌上句会係

自由題

春雨や降るとも見えて石ぬれて
京の寒きつい口ぐちに婚終る
緑日の植木の中に迎春花
降る雪や帰省子送り気もそぞろ
うたた寝の夫に譲りて置炬燵
春雪や庭の相親一転す
春立つや魚籠よりもれし水の音
つばやきが心経となり枯尾花
産声を待らし長椅子冬あかつき
あとさきの解らぬ海鼠つかまさら
間違いの賀状一枚隣まで
大晦日妻の手と口よく動く

金谷友江
山本美代子
嶋田喜代子
中島一子
佐藤雅子
周東澄江
中島富士子
河合富美枝
山本のり子
苗田郁子
小久保あきを
野村昭輝

マンガで楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

露地

「ろじ」は露地と書く方が一般的で、屋根などのない地面や、家々の間の狭い道のことを言うのはよくご存じでしょう。仏教語での露地は「煩惱のおおいを取り払い、それから解脱した境地のこと」を言います。法華経の火宅の喩えで、長者の子どもたちが燃えさかる家からやつとの思いで逃げだし、何もない地面の上でほっとしたこと、平安な場所のことを言うようになりました。煩惱を家屋に喩えたわけですが、有るには有るなりに、無いには無いなりに煩惱に悩まされるのがわれわれ凡夫でしょう。



編集後記

国会は弥生のうちより四月馬鹿 岱潤

「信任」という言葉を辞書で引いてみた。Ⅱ人を信用し、ことの処理を任せることⅡとあった。信任をされた首相が一週間もたずに密室で辞職が決まり、そうかと思えば公の場ではまた再任される。ここまで来ると今の与党議員の心情は、大衆の理解を求めていることが明白になる。何ともおかしいことだ。

「信じる」というこの言葉の重さが感じられなくなったような気がする。「信じる」といえば布教師さんがよく話されている「良く知るといえども、信じなければ知ったことにならない。

しかし信じているといえども、称えなければ信じたことにならない」という言葉を思い出す。私はこの言葉を聞いたときにもうひとつ必要な気がしていた。つまり「称えていても、行動が伴わなければ意味がない」ということである。行っていることと言っていることが違つては、信じていることにも知っていないことにもならないのは当然のことだろう。

□先だけの僧侶と言われないう、私自身がしっかりと信仰を持ち、それに基づく行動をとりたいと思う。そんな自省の念を、春門出の季節に敢えて自分に言い聞かせたい。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤寛道

村田洋一

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十七巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十二年二月二十日

発行

平成十二年四月一日

発行人

真野龍海

編集人

宮林昭彦

印刷所

株式会社

〒一〇五〇〇一

東京港区芝公園四・七 四明照会館内

発所

法然上人鑽仰会

電話

〇三(二五七八)七九四七

FAX

〇三(二五七八)七〇二六

振替

〇〇一八〇八八二二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害ならせ



民家近し、静かに



足元注意



避難口



踏切あり



注意



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



きれるな



われ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

「浄土」特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人鑽仰会まで。

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

水晶 数珠

水晶腕念珠

水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

水晶数珠 ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円

プレスレッド ④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円

⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額

家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

